

## 『高知大学留学生教育』第15号の刊行に寄せて

高知大学国際連携推進センター  
センター長 今井典子

2020年から続くコロナ禍の中、日本での学びを希望する海外からの留学生が渡日できないまま、そして海外への留学を希望する高知大生が渡航できないままおよそ2年が過ぎてしまった。コロナ禍前には予想できなかった状況である。新型コロナウイルス感染症やオミクロン株の感染流行に加え、自然災害など、現代は何が起こるか予測困難な時代にあるといえる。このような時代背景を受け、'VUCA'という言葉がしばしば聞かれるようになった。これは、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字からなる用語<sup>1</sup>であり、私たちをとりまく環境が一層複雑性を増し、将来の予測が困難になった状態を意味している。今後のコロナ禍の状況、コロナ禍後の社会、その中でのグローバル化の進展、日々発展するIT技術などにより、社会環境は急速に変化しており、予測が困難な時代となっているのである。VUCAが存在する未来を生き抜くためには、留学生も高知大生も、柔軟に対応できる能力、あるいはFriedman(2005)<sup>2</sup>が言うように、古いことを行う新しい方法や新しいことを行う新しい方法を常に学び続け、そして吸収し、運用できることが必要となるかもしれない。

国際交流に関しては、現在、コロナ禍前のように自由に海外に行ったり、あるいは海外から日本に来たりすることが難しくなっている。今後もキャンパス内で対面にて留学生と交流することはまだまだ十分できないかもしれない。しかし、立ち止まることなく、現状の中で、できることに取り組まなくてはならない。今だからこそできる一つの方法として、コロナ禍前には主流ではなかったオンラインを活用した国際交流の形がある。コロナ禍の中、本大学のみならず、国内外で取り組まれている方法である。遠い世界と瞬時に

---

<sup>1</sup> 詳細は、Fadel, C., Bialik, M., & Trilling, B. (2015). *Four-dimensional education: The competencies learners need to succeed*. Center for curriculum redesign. のp.13を参照。

<sup>2</sup> Friedman, T. L. (2005). *The world is flat: A brief history of the twenty-first century*. Picador/Farrar, Straus and Giroux. のp.309を参照。

つながることができ、実際に渡航する形での留学と比べ、費用と時間を節約できることなどがオンラインでの学びの利点として挙げられる。「どうかして相手に伝えなくてはならない」、「相手の言うことを理解したい」、「相手とコミュニケーションを取らなければ」という状況に身を置くこともオンライン上で可能であり、制約がある中でも有意義な時間を過ごすことができるのである。

オンラインであっても言語を学ぶことで、多種多様な文化や価値観に対するさらに深い理解にも結びつくことになる。価値観の多くは、生まれ育った環境によって培われ、自分とは異なる文化背景を持つ人々と交流することで、多様な価値観に触れることが可能となる。これまで当たり前で常識だと思っていたことが、実はそうではないと気付いたり、あるいは、全く違う価値観に触れることで、自分の物の見方や考え方が変化し、それまで持っていた固定概念が覆されることがある。そのような経験をすることで、海外の人々だけでなく、国内の人々に対しても、さまざまな考え方をより寛容に受け入れやすくなると考えられる。国際交流の意義は、言語の習得のみならず、多様性への寛容を獲得することであるといえる。今後もオンラインという今できる可能な形を十分に活用しつつ、多くの学びを得ることができるよう、国際交流を止めず、前に進めたいものである。